

夜をひとさじ (四〇〜五〇分)

登場人物 (十一人)

カラス 目をえぐられたため、見えない。
スズメ 舌を切られたため、しゃべれない。

ウグイス

メジロ

モズ

シジュウカラ

ミミズク

嫁

旦那

姉ネコ

弟ネコ

舞台装置

- 上手あるいは下手の奥にカラスの部屋を高く作り、横に階段を設ける。周囲は山に見立てる。
- カラスの部屋の反対側手前に夫婦の部屋。ちゃぶ台、布団を置け、旦那の作業場を作れる程度の広さ。

参考

- 舌切り雀をテーマとしている。こだわらないが、舞台装置や衣装を和風に揃えると理想的。雰囲気大切にしたい。
- 適宜改稿してよい。カラスが読む詩もわりと適当なので、よりふさわしいものがあれば変えてよい。
- 役者が十人ならメジロを、九人ならさらにネコのことらかを削るとよい。
- 役者に三人以上の余裕があれば、木の役を設けたい。可動な木を用意し、森のシーンでは夫婦の部屋を、夫婦の部屋のシーンではカラスの部屋を隠す。また

- 踊りのシーンでは曲に合わせて手拍子を打ったり、会話に反応を示したり、移動をコミカルに行うなど、単なる背景ではなく役としての配置が好ましい。
- こだわらないが、踊りの音楽を童謡「七つの子」をアレンジしたものにし、エンディングで原曲を使用すると理想的。木の役がいれば歌ってもよい。

あくまで執筆時の想定であるので、上演にあたっては演出家に任せる。

オープニング

カラス、カラスの部屋に板付き、スポット。周囲にははばたく鳥たちのシルエットが浮かぶ。

カラス

夜をひとさじ、すくうのです
星がどろりと溶け出して、
眠るまぶたにこぼれ落ち、
きらきらはねる瞬きは、
暗い山へと染み消える
夜をひとさじ、もうひとさじ

一場

オープニングを引き継いでカラス板付き、鳥たちははばたいている。スズメが小走りで登場、階段を上がり、カラスの部屋の前で二つ、音を立てて足踏みをする。追って旦那、おそろおそろの登場。

カラス

お入り。

スズメ、カラスの部屋へ。カラスの隣に座り、カラスの手を取る。ミミズク、階段を上がる。

ミミズク

スズメのお客さまです。

カラス

(うなずいて) 通せ。

ミミズクが招いて、旦那、階段を上がる。ミミズクは旦那に譲り、下がる。

旦那
カラス
あなたが、カラスさんですか。
(うなずいて) このたびは、この子がたいそう世話
になったようで。

旦那
旦那でもない！ それより、わたしの家内が取り返
しのつかないことをしてしまいました。謝って許さ
れることではございませんが、せめて一言お詫びを
したく、こうして参った次第です。本当に、申し訳
ございません。

スズメ
(首を振り、カラスに訴える)

カラス
旦那
なにがあつたかはわかりませんが、
なにがあつたかと申しますと、

(手のひらを見せて制止し) スズメはあなたに感謝
しております。わたしとしても、この子が帰ってき
てくれたことがなによりうれしい。ぜひお礼をさせ
ていただきたい。

旦那
そんな、もったいない。

カラス
おまえたち！

ミミズクを除いた鳥たち、並ぶ。カラスがスズメを
促し、スズメ、跳ねるように鳥たちの中央へ。ミミ
ズクは席を用意し、旦那に勧める。
軽やかな音楽。鳥たち、踊り始める。

旦那
これはこれは、見事な踊り。

カラス
(笑って) ウグイス！

ウグイス
はい！

カラス
メジロ！

メジロ
はい！

カラス
モズ！

モズ
はい！

カラス
シジュウカラ！

シジュウカラ
はい！

カラス
そしてスズメ。自慢の踊り子たちです。

旦那
なんともかわいらしいことで。いやあ、眼福です。

カラス
お気に召したようでなにより。本当なら歌もお聴か

せしたいところだったので。

旦那

さぞ美しい合唱になったでしょうね……家内があの子の舌を切りさえしなければ。まこと、申し訳ない。失礼。やめましょう、あなたは悪くないのだから。

カラス

……そうだ、ミミズク、あれを。

ミミズク

はい。

ミミズク去る。鳥たちの踊りが終わる。

旦那

すばらしい踊り、ありがとうございました。もともとお詫びの気持ちで持ってきたものですが、どうか皆さままでお召し上がりください。

旦那、箱を差し出すがカラスは首をかしげるだけで取ろうとしない。スズメが駆け寄り、旦那はスズメに渡す。鳥たちが集まってくる。

シジュウカラ

米だ！ 麦も！

旦那

貧乏なもので、少なくて申し訳ない。

メジロ

あ、みかんもある！

旦那

まだ青いですが、庭になっていたの。

モズ

おれが食べられるのは……ちえ、ないや。

旦那

申し訳ない、では次は、きつと。

ウグイス

モズったら、もう！ ごちそうですよ、カラス！

カラス

お気遣いいただいて申し訳ない。ではありがたく頂戴するといたしまして、こちらのお礼も、どうぞお受け取りください。

旦那

いやいや、もう十分にいただきました。けっこうで

カラス

ございます。

そういうわけにはいかない。ミミズク、まだか。任意のタイミングでミミズク、大小二つのつづらを持って登場している。

ミミズク

お待たせいたしました。旦那さま、どうぞ、どちらか一つをお選びください。

旦那
いいいえ、本当に、けっこうでございます。

スズメ
(首を振り、旦那に勧める)

カラス
わたしにはもう不要なものです。どうぞ、お受け取りください。

旦那
では……ではお言葉に甘えまして、小さなほうをいただきます。これで十分でございます。

カラス
(満足そうに笑って) またどうぞ、お越しく下さい。

スズメも喜ぶでしょう。

ええ、また参ります。

旦那
おれ、虫が好き！

モズ
モズ！

ウグイス
きつと持ってきてますよ。さて、名残惜しいですが、

旦那
今日のところはこれで。

カラス
夜の山は迷いやすい。ミミズク、送ってさしあげろ。はい。

旦那
いいいえ、まだ日も落ちておりません……

スズメ
(人差し指を口に当てる)

さあ、参りましょう。

ミミズク

旦那、一礼し、ミミズクとともに去る。舞台は徐々に暗くなり、カラスの部屋にスポット。スズメ、階段を上がって部屋の手前で足踏み。カラスが手を伸べ、それに従ってカラスに寄り添う。

カラス
いい人間だったね。

スズメ
(うなづく)

カラス
あのような人間のためになら、わたしのどんな宝を失ってもいい。もちろん、おまえ以外の、だが。

スズメ
(カラスを見上げる)

カラス
無事に帰ってくれて、本当によかった。おまえがいなくなっただけにはどれほど心配したことか。もう、どこにも行かないでくれ。

スズメ
(しばしの沈黙ののちうなづく、カラスの腕に顔を埋める)

カラス
夜をひとさじ、すくうのです

帯のほどけた赤いベベ
歌声途絶えた暗闇に
どこまで響く、おまえの名

カラス

……おまえの声を聞けないことだけが残念だ。
カラス、スズメの存在を確かめるように抱きしめる。

二場

夫婦の家。嫁板付き、旦那がつづらを持って登場。

旦那
今帰った。

嫁
……ふん。

旦那
なんだ、その態度は。怒りたいのはこっちだ。

嫁
なにさ、スズメ、スズメって。あれがわたしののりを食べたからバツを与えたんじゃないのさ。

旦那
程度というものがある。たかが洗濯のりじゃないか。おながが空いていて、うっかり間違えただけなのに、舌を切るだなんて無慈悲もほどがある。

嫁
あれがわたしらになにをしてくれる？ ただ米をついばむだけ、朝は早くからチュンチュンうるさい、そのくせ一銭だって稼いでこない。厄介者以外のなんでもないじゃないか。

旦那

米はおれの食べるぶんから分けてやったし、早起き

の習慣がついてよかったじゃないか。金にならんと
いやなのか、ごうつくばりめ。

まあ、だれがごうつくばりですって？

安心おしよ、スズメはもう帰ってこないから。

あら、死んだのかい。

元氣だよ。今日はスズメのお宅にうかがってね。親
方さまはとていいかたでね、あんなことをしてし
まったというのに、おれを歓迎してくださった。ス
ズメは幸せに暮らすよ。

…それ、なんだい。

お礼だと言って、くだすった。

さんざん世話してやった礼が、そんな小さなつづら
かい。けちだねえ。

大きいつづらと小さいつづらをご用意くださったよ。
おれがこつちを選んだんだ、そもそも、お礼などい
ただける立場じゃあないんだからね。

ふん。で、なにが入ってるんだい。虫かい、枯れ葉
かい。よくて木の実じゃないかねえ。

旦那がつづらを開けると、金や銀、宝石などが出て
くる。

まあ！

なんというお宝！

あんた、でかしたよ！ いや、あんた、とんでもな
い間違いをしたよ。

間違い？

そうとも！

そうか、間違いか、ならば合点がいく。明日にでも
返しに行こう。

そうそう、それで、大きいほうと取り替えてもらわ
なくちゃね。

なにを言ってるんだ。

だから、あんた、大きいほうをもらってくればい
んだよ。

どうして。

旦那

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

旦那

嫁

嫁

ばかだねえ！ 大きいつづらにはきつと、もつとたくさんのお宝が入ってただろうよ。それと交換してもらおうのさ。

旦那 嫁

そんな恥知らずなことができるか。

恥知らず？ とんでもない。考えてごらんよ、あんた、けがをしたあの子を拾って、手厚く看病したじやないか。そのおかげで、あんた、あの子はまた飛べるようになった。本当に感謝しているなら、わざわざ選ばせるようなことをしないで、大きいつづらを差し出すべきだろうよ。

旦那 嫁

だけど……

おまえさんならどうする。もしわたしらに子どもがいて、よそさまに助けていただいたら、めいっばいのお礼をするだろう。

旦那 嫁

それは、そうだ。

だろう。じゃああんた、明日の朝一番に、スズメのところへ行っておいで。ああそうだ、お土産くらいは用意しておいてあげるよ。麦かい、粟かい。

みかんと虫もだ。

虫？

約束をした。

うへえ、だから鳥はいやだ。でも、仕方ないね。さあ、あんたは早く寝ておいで。

わかったよ。じゃあ、頼んだ。おやすみ。おやすみ。

旦那 嫁

嫁、家を出る。

嫁

……まあわたしなら、頭一つ下げるのもごめんだけどね。

嫁、去る。旦那、宝をつづらに収めて蓋をし、しばらく見つめる。

三場

山。カラスとスズメはカラスの部屋に、ミミズクは部屋の前に、その他の鳥たちはその周囲に板付き。部屋の前でなかをうかがっていたミミズクが、そっと離れ、鳥たちの輪に加わる。

ミミズク

カラスが寝たようです。

ウグイス

あらあら、日が昇ってようやく暖かくなってきたのに。

メジロ

仕方ないよ。スズメは？

ミミズク

一緒に寝ています。疲れてるのでしよう、あんなけがをして帰ってきたのに、ゆっくり休む暇もなかった。

シジュウカラ

突然いなくなったのにも驚いたけど、帰ってきたらしゃべれなくなってたのには、本当にびっくりしたわ。

ミミズク

あの人間が手当てしてくれなかったら、帰ってくることもままならなかったでしょうね。

モズ

でも、舌べらちよん切ったのも人間だぜ。

ウグイス

ちよっと、モズ。

モズ

なんだよ、本当のことだろ。

ウグイス

あのおじさんじゃないわ。

モズ

そんなこと、わかってるよ。

シジュウカラ

なんでスズメは、あの人のところにいたのかしら。

ミミズク

さあ、スズメからはなにも聞けませんしね。

旦那、きよろきよろしながら登場。つづらを抱えている。

旦那

あ、よかった、みなさんおそろいで。おはようございます。

モズ

あ、おっちゃん！

ミミズク

これはこれは、おはようございます。どうされました？

旦那 実は、昨日いただいたこれを……お返ししなくては、と。

ミミズク 返す？ それはいったい、どうして。

旦那 なかを拝見しました。金銀宝石の、すばらしいお宝が入っておりました。それで、これはなにか別のものと間違えたのだろうかと思って、こうして参った次第です。

モズ おっちゃん、虫は、虫は？

ウグイス ちよつとモズ、黙ってなさい！

ミミズク そういうことでしたか。いいえ、間違えてはおりませんよ。それらは、かつてカラスが集めたものです。そんな大切なものを。

旦那 (首を振り) もう、無意味なものです。気がつきませんでしたか？ カラスは、目が見えないのです。なんと、そうだったんですか。

ミミズク 美しいものがたいそう好きで、海岸を探したり、ゴミ捨て場をあさったり、ときには人間の家に忍びこむこともあったようです。それが行き過ぎて、人間

に捕まり、目をえぐられてしまったのですがね。

メジロ 目をえぐる？

ウグイス メジロ、声大きい。

旦那 まさか、そんなむごいことを。

ミミズク 殺されなかっただけよかった、と言っていましたよ。もっとも、あまり思い出したくはないみたいですが——スズメのことも、そう思っているのでしょうか。そうでしたか。

旦那 どうかお受け取りください。罪滅ぼしの意味もあるのです。

旦那 わかりました。そうか、そうでしたか……やつと、スズメの言っていたことの意味がわかりました。

シジュウカラ スズメがなにか言っていたのですか？

旦那 目を探している、と。

鳥たち、顔を見合わせる。

ミミズク

それは、いつ。

旦那

初めて出会ったときです、一月ほど前でしようか。うちの近所には野良猫が何匹かいるのですが、それに襲われたのでしょうか。けがをしているのを見つけて、拾って帰ったのです。手当をしてやり、家まで送ってあげようと言っていると、目を見つけるまでは帰らないと言い張りまして。

シジュウカラ

目って、じゃあ、あの子。

旦那

カラスさんの目を探していたのでしょうか。

シジュウカラ

まあ。

メジロ

なんだって急に、探そうなんて思ったんだろう。

モズ

それで自分が舌をなくしてんだもん、世話ないよな

あ。

ウグイス

モズ、いい加減になさいよ。

モズ

それよりおっちゃん、虫は？

ウグイス

モズ！

旦那

ああ、はいはい、持ってきましたよ。

旦那、土産を振る舞う。

モズ

やったね！

ウグイス

もう、本当、子どもなんだから。

モズ

なんだよウグイス、さっきから！

ウグイス

あんたが話の腰を折るからでしょう。

メジロ

二人ともうるさい。

ウグイス

なによ！

モズ

なんだと！

シジュウカラ

……可愛いそうな二人。

ウグイス

なによ、シジュウカラまで！

シジュウカラ

あんたたちのことじゃないよ。

ミミズク

カラスとスズメのことです。

ウグイス

ごめんなさい。

旦那

本当に……本当に、可愛いそうなおことをしました。

モズを除いた全員、カラスの部屋に目をやる。と、

物陰から嫁が顔を出す。だれも気づかない。

四場

引き続き山。カラスとスズメはカラスの部屋（スズメは階段で遊んでいてもよい）、ミミズクを除いた鳥たちはその周囲に板付き。ミミズク登場、階段を上がってカラスの部屋の前へ。

ミミズク

カラス、お客さまです。

カラス

だれだ。

ミミズク

わかりません、人間の女です。

スズメ、首をかしげて立ち上がり、様子をうかがう。嫁登場。それを認めたスズメ、慌てて戻り、カラスにすがる。

嫁

スズメ、スズメやい。いるんだろう？

メジロ

あれはなんだ？

シジユウカラ
嫁 気持ち悪い声、ネコみたい。

おやまあ、あんたたち、スズメのお仲間かい？ 旦那から聞いたよ、ずいぶんよくしていただいたように。

モズ
おっちゃんの嫁さんか！ ってことは……スズメの舌を切った悪いやつ！

ウグイス

モズ、ちよっと！

止めるなウグイス、スズメも間抜けだけどな、おれはこいつを許そうとは思わないんだ。

ウグイス

そういうことじゃないよ、落ち着きなさい。

嫁

悪いことをしたと思ってるよ。大事なのりを食べられて、ついカツとなったんだ。だけどやりすぎた。反省してる。

モズ

どうだか。

嫁

スズメはいるかい。そうそう、親方さまにもご挨拶しなくちゃあねえ。

カラス

いやな声だ。

嫁

案内しとくれよ、せっかく来てやったんだ。

シジユウカラ

来てやった、ですって。

メジロ

傲慢。

シジユウカラ

横柄。

ウグイス

ずうずうしい。

嫁

いつまで待たせるつもりだい。

カラス

通せ。

ミミズク

はい。

ミミズク、嫁のもとへ。

嫁

しつげがなっていないねえ、お客をほっぴらかしちゃんあいけないよ。

ミミズク

申し訳ありません。

嫁

いいさ、わたしは寛大なんだ。

ミミズク、嫁をカラスのもとへ案内する。スズメはカラスの背に隠れる。

嫁 ……まあ、あんたは。

カラス このたびは、スズメが世話になったようで。

嫁 え、ああ。ええ、ええ、お世話させていただきま
した。

スズメ (首を振る)

嫁 けがをしていたスズメを、旦那が連れ帰りまして。

以後は一生懸命、自分が食うのを我慢して米をやっ
た日もありました。

スズメ (首を振る)

嫁 悪さをしたバツとはいえ、舌を切るだなんて、やり
すぎた。悪かったと思っているよ。ごめんねえ、ス
ズメ。

スズメ (うつむく)

元氣そうでなによりだ。それじゃあ、わたしはこれ
で帰るよ。

カラス そうですか。ミミズク、送ってさしあげろ。

ミミズク

嫁 はい。
で、お土産は。

ミミズク

え？

気が利かないねえ、お土産だよ、お土産。ああ、小
さいつづらは用意しないでもいいよ、どうせ大きいほ
うをいただくからね。

ミミズク

しかし……

うちの旦那はばかだからねえ、今日も、小さいほう
を持って帰ったんだろう。でもねえ、あんたたち。
わたしは親切だから教えてあげるけどねえ、礼儀が
なっていないよ。

ミミズク

はあ、しかし、

カラス

いい、さしあげろ。どうせいらぬものだ。

嫁

さすが親方さまは太っ腹だねえ！

ミミズク

わかりました、少々お待ちください。

ミミズク去る。

メジロ

欲張り。

シジュウカラ

がめつい。

ウグイス　　ずうずうしい！
モズ　　　　さっきと同じじゃん。
ウグイス　　だって、それ以外にないわ。

ミミズク、大きなつづらを持って登場。嫁、奪うように受け取る。

嫁　　　　　　ありがとうございますわ。それでは皆さま、ごきげんよう。

嫁去る。

カラス　　　　帰ったか。
ミミズク　　ええ。
カラス　　　　二度と立ち入らせるな。
ミミズク　　わかりました。

鳥たち、カラスの部屋の前に集まる。

モズ　　　　　なあ、あれ、なにが入ってるの？
ウグイス　　お宝、あげちゃったの？
ミミズク　　まさか。あれはですね……。

ミミズク、鳥たちに耳打ち。鳥たちとたんに笑い出し、ミミズクを除き、どたどたと去る。

カラス　　　　夜をひとさじ
スズメ　　　　夜をひとさじ……銀の三日月、遠のく光、永遠の：
カラス　　　　：（徐々にうつむく）
スズメ　　　　（カラスをなで、抱きしめる）
カラス　　　　（顔を上げ）いいんだ。目には映らずとも、美しいものはたくさんある。なあ、スズメ。
スズメ　　　　（一呼吸置いて、うなづく）

五場

夫婦の家。旦那板付き、内職をしている。
家の周囲に姉ネコ、弟ネコ登場。

弟ネコ おなかが空いたなあ。

姉ネコ うるさい。

弟ネコ おなかが空いたよ、姉ちゃん。

姉ネコ あたしも腹ぺこだよ。

弟ネコ おなか空いた！

姉ネコ 我慢おし！ ちょっと待ってな。

姉ネコ、夫婦の家をそつと覗く。

旦那 疲れたなあ、そろそろ寝るか。それにしてもあいつ

はどこへ行ったんだ。

姉ネコ よしよし。あの人間が寝たら忍びこむよ。

弟ネコ わかった。早く寝ろー、早く寝ろー。

旦那 あいつが帰るまではがんばるか。

弟ネコ 早く寝ろー！

旦那 ……今日はやけにネコがうるさいな。

旦那が出入り口を見やり、ネコたち、慌てて隠れる。

姉ネコ、静かに、とジエスチャー。

弟ネコ 魚が食べたい。肉が食べたい。あのスズメが食べたい。ああ、あるとき逃がしたスズメ！ 満腹だったからって無精しないで、捕まえて取っておくんだった。

姉ネコ 今さら後悔したって仕方ないよ。大丈夫、ここんちにいるのはわかってるんだから…：おかしいね、ぜんぜん、スズメの匂いがしない。

弟ネコ うそだあ、姉ちゃん、そう言って独り占めするつもりだろう。

姉ネコ ちょっと覗いてみてよ。

弟ネコ
：…ホントだ、見当たらない。でも、いい匂いはするぞ。

と、向こうから嫁、大きなつづらを抱えてやってくる。

姉ネコ
いけない、隠れるよ！

弟ネコ
え、え、え？

姉ネコ、弟ネコを引っ張って物陰に。嫁、家の手前でつづらを下ろす。

嫁
はあ、くたびれた。あの人はまだ起きてるみたいだねえ。これじゃ家に入れないよ。まあいいさ、この

お宝はわたしのものだ。あの人に知られたら、またうるさいからね。さあて、どれくらい入ってるかな…。

嫁
なんだい、これは！
鳥たち、騒ぎながら出てきて嫁を取り囲む。

鳥たち、騒ぎながら出てきて嫁を取り囲む。

メジロ
鳥たち
山の美化にご協力、
ありがとうございます！

嫁、座りこむ。鳥たち、大笑いしながら嫁の周りを回り、去る。やがて嫁、立ち上がって地団駄を踏み、缶をいくつか放る。

嫁
ばかにして！

と、旦那、家から顔を出す。

旦那 なんだ、おまえか。なにをしてたんだ。
嫁 あ、あんた！ なになって……（ハツとして）いや、
旦那 なんでもないよ。
嫁 なんでもないよってことはないだろう、こんな時間ま
で。
旦那 散歩をしていたら、うっかり迷ったのさ。山は怖い
ねえ。
旦那 山に入っていたのか。なんでまた……まあ、無事に
帰ってくれてよかった。疲れたろう、早く上がって
おいで。
嫁 はい。

旦那、ちゃぶ台を片付け、布団を敷く。嫁、家にな
がろうとして、思い直し振り返る。投げた缶を拾お
うとするが、すでにネコが群がっている。

弟ネコ 姉ちゃん、缶詰だよ！ ごちそうだよ！
姉ネコ 舌を切らないように気をつけなよ。でもおいしいね。
弟ネコ あのつづらのなかも、ぜんぶ缶詰かな。
姉ネコ いっぱい入ってるの、あるかな。
嫁 まあまあ、卑しい野良猫なこと！
弟ネコ 痛い！
姉ネコ だから言ったでしょう、いい、缶の切り口ををなめ
たらだめよ。
弟ネコ あ、姉ちゃん、この缶、開いてないよ！
姉ネコ でかした！ どうやって開けようか。

ネコたち奮闘するも開けられない。しばし眺めてい
た嫁、思いついてにやりと笑うと、歩み寄って缶を
取り上げる。姉ネコは逃げようとするが弟ネコは離
れず、嫁、缶を開ける。

弟ネコ ごちそう！
嫁 あげるとは言ってないよ！ わたしの言うことを聞
くと約束したら、あげる。
弟ネコ ごちそう！ ごちそう！

嫁

うまくやったら、もっといいものもあげるよ。魚でも肉でも。

弟ネコ

ごちそう！

姉ネコ

本当に？

嫁

(うなずいて) さあ、まずはこの缶くずを片付けておくれ。裏に物置があるから、朝になるまでそこに隠れるんだ。明日、あの人が出かけたら――。

六場

山。カラスは部屋で寝ている。鳥たちはその周囲に板付き。

メジロ

そうしたらさあ、へなへなあって座りこんじゃって、あの顔！ すかつとしたよ！

モズ

見せたかったなあ、スズメも来ればよかったのに。ちよつと。

ウグイス

小さいつづらにしておけば、ゴミも少なかったのにね。

シジュウカラ

ミミズク

欲しいなんて言わなければ、持ち帰ることもなかったんですよ。ま、こちらとしては助かりましたがね。あれ、臭くって。

スズメ

(ニコニコと聞いている)

ウグイス

おじさんには悪いことをしたわね。

ミミズク

仕方ありませんよ、そういう人を嫁にしたんですか

ら。

ウグイス

あら、けっこう冷たいのね。

ミミズク

そうですか？

嫁

そうよ！

嫁、ネコ姉弟、いつのまにか登場。鳥たちの背後から割って入る。鳥たち、驚いて散り散りになり、スズメはカラスのもとへ逃げようとするが、嫁に捕まる。

嫁

お待ち。あんたに話があるんだ。

鳥たち

スズメ！

モズ

スズメを放せ、ばばあ！

嫁

口の利きかたには気をつけな。言うことを聞けば悪

いようにはしないよ。

弟ネコ

おいしそうな鳥たちだなあ。

姉ネコ

ねえ、捕まえていい？

シジュウカラ

ネコ……。

嫁

まだだめだ。

ミミズク

(鳥たちを守りながら) なにをお望みですか。

嫁

まずは話をお聞きよ。邪魔しないかぎり、この子らをけしかけたりはしないさ。

鳥たち、黙って顔を見合わせ、ミミズクの背後に隠れるように固まる。

嫁

よしよし。さあて……いいかい、スズメ。わたしは

スズメ

ね、ただでお宝をくれたなんて言わないからね。

スズメ

(首をかしげる)

嫁

あんたが探しているものを、わたしは持っている。

スズメ

(首をかしげる)

嫁

察しが悪いねえ。目だよ、目。

鳥たち

目？

メジロ

目って、カラスの？

嫁

もちろん、あんたの舌もある。どうだい、欲しいだろう。

スズメ

(うなづく)

嫁

そうだろう。交換だ、めいっばいのお宝を持っておいで。言っておくけど、米やら麦やら、粟やらじゃあないよ。もちろん虫なんかもってのほか！

モズ

頼まれたってやるもんか。

嫁

あんたが持ってくるんだ、スズメ。もちろん旦那がない時間にだよ。ここ一月、ずっと旦那といたんだ。いつ旦那が家を空けるかは、わかっているだろうね。

スズメ

(ためらいがちにうなづく)

嫁

明日の夕方までに持っておいで。

スズメ

(思案する)

ウグイス

だめだよ、スズメ！

スズメ

(ウグイスを見る)

ウグイス

もうどこにも行かないでって、カラスが言ってたでしょう。

シジュウカラ

そうだよ、カラスが悲しむ。

嫁

うるさいね！

弟ネコ

捕まえる！

姉ネコ

捕まえる？

ミミズク

(二人をかばって)スズメ、二人の言うとおりです。

嫁

あなたがいなくなったと気づいたら、きっと……

モズ

わかりやしないよ、あれはなんにも見えないし、スズメは口がきけないんだ。

嫁

だれのせいで……

メジロ

(小さい鳥を順に指さして)あんたか、あんたか：

嫁

：あんたでもない。目をつぶって触ったら鳥なんかみんな一緒だ。スズメのふりをして一緒にいてやればいいだろ。二、三日だけのことなんだから。

ミミズク

……カラスを騙すなんてできない。

スズメ

ついてもいい嘘ってのもあるのさ。

嫁

……スズメ、カラスは、目に未練などない。

スズメ

(嫁に向き直り、しばし考えたのち、首を振る)

嫁

すぐに答えを出さなくてもいい。明日まで待ってやる。つづらいつばいのお宝を持っておいで。いいね。

……行くよ。

嫁、去る。ネコ姉弟、鳥たちを威嚇しながら去る。

シジュウカラ

怖かった：：なんなの、あのおばさん。

モズ

無視だ、無視！ 夕飯の話じゃないぞ。

ウグイス

今は笑う気にならないわ。

メジロ

スズメ、大丈夫？

スズメ

(ぼうっとつむいている)

メジロ

忘れろよ。ぜんぶ、終わったことなんだ。

スズメ、鳥たちから離れ、カラスの部屋へ。

メジロ

スズメ：：。

ミミズク

カラスが寝ていたのは不幸中の幸いでしたね。こんな話、聞かせられない。

スズメ、カラスの部屋の手前で足踏み。カラス、ゆっくりと起き上がり、伸びをする。

カラス

お入り。

スズメ、部屋に入る。カラスのそばに座り、そっと目元に触れる。

シジュウカラ

そうね。

七場

山。カラス、カラスの部屋に板付き、スポット。周
囲にははばたく鳥たちのシルエット。

カラス

夜をひとさじ、すくうのです

おまえの羽がまとう風

おまえの羽がまとう熱

手のひら満たすぬくもりを

ゆりかごいっぱい詰めこんで

カラス

スズメ。スズメは、いるか。

山、明るくなる。しかしスズメはいない。

ミミズク

スズメはどこだ？

メジロ

いない。

鳥たち騒ぎ出す。そこへ旦那、登場。

旦那

みなさん、こんにちは。

モズ

あ、おっちゃん！ なあ、スズメ、見なかった？

旦那

スズメ？ いいえ……

メジロ

まさか！

ミミズク

静かに！

鳥たち、一斉にカラスを見やる。それから旦那を促
しつつ、静かに、素早く去る。

カラス

スズメ？ スズメ、スズメ……（呼び続ける）

八場

夫婦の家。嫁板付き。スズメ、小さなつづらを持って登場。

嫁

待っていたよ、スズメ。(周囲を見渡してから)さ、なかへお入り。

スズメ

(黙って従う)

嫁

(スズメを家の奥へ押しやり)お宝はそれかい？

スズメ

さあ、まずはなにを持ってきたか、見せておくれ。

嫁

(首を振る)

スズメ

なんだって？

嫁

(首を振り、片手を嫁に差し出す。くれ、のしぐさ)

スズメ

先に目玉を出せ、ってことかい。

嫁

(うなづく)

スズメ

疑り深いねえ。なんだってあんた、目玉なんか欲しいんだい。カラス本人は目玉なんて、もうどうでも

いいんだろう？

スズメ

(首を振る)

嫁

ふん：：とにかく、先にそれをおよこし。そのお宝だって、もういらないんだろ。あんたのお仲間が話していたのを、わたしはこの耳で聞いたんだ。

スズメ

(なおも首を振り、くれ、を強調する)

嫁

本当、かわいくない！ おい、あんたたち！

家の奥からネコ姉弟登場。

嫁

さあ、早くお宝を渡すんだ。

弟ネコ

早く、早く。

姉ネコ

あんたがそれをよこせば、ご褒美をもらえるんだ。よこさないと、あんたを食べちゃうぞ。おれ、もうおなかがぺこぺこなんだ。

弟ネコ

と、旦那を先頭に、鳥たち駆けて登場。

旦那 嫁

おい、おまえ！
やだ、あの人だ。あんたたち、スズメをつれて、奥に隠れておいで！

ネコ姉弟、スズメを引っ張って物陰へ。旦那、家に入ってくる。

嫁

あんた、仕事はどうしたんだい。

旦那

スズメ、スズメはどこへ行った？

嫁

スズメ？ 知らないよ、お里へ帰ったんだろう。

鳥たち

スズメ！ スズメ！（ロクに呼びかける）

嫁

うるさいねえ、ピーチクパーチク！

旦那

正直に言え、おれはもう、ぜんぶ聞いたんだ！

嫁

ぜんぶ？ ぜんぶって、なにさ？

旦那

ぜんぶはぜんぶだ。過ちを許してくださいださったご恩を忘れ、カラスさんにつづらをたかったこと。カラスさんの目をダシに、スズメにお宝を持ってこさせようとしたこと。カラスさんの目だなんて、そんなものないのに。

スズメ

！

ウグイス

ないの？

嫁

あ、あるわよ、あんたには教えていないだけさ。あれはきれいだからね、大事に取ってあるんだよ。

旦那

嘘をつけ、スズメの舌だって川に捨てたくせに！

スズメ

！

シジュウカラ

それも嘘なの？

旦那

まったく情けない！ おまえなんかと結婚するんじやなかった。

嫁

やなかった。

旦那

…なんて？

嫁

おまえなんかと、結婚するんじやなかった！

旦那

そんなこと…そんなこと言ったらわたしだって、

…

スズメ

飛び出す。

姉ネコ

あ、こら！

弟ネコ 待て、ごちそう！

旦那 スズメ！

シジュウカラ やだ、ネコ！

嫁 もういいわ。あんたたち、みんな食べちゃいなさい！

ネコ姉弟と鳥たちの乱闘。鳥勢はミミズクとモズが奮闘するも、ネコ姉弟が優勢で、なかなか守りきれない。なんとかネコを捕まえようとする旦那を、嫁が枕などを振りながら追い回す。

嫁 だいたい、最初から気に入らなかつたんだ。働き者の

いい男だと父ちゃんが言うから結婚したけど、仕事ばかり。おもしろい趣味もない、まじめすぎて冗談一つ通じない、そのくせ稼ぎは少ないんだから、つまらないつたらないよ。

旦那 おれだって、ご恩のある親父さまの頼みがなけりや、

おまえみたいになごうつくばりと結婚するもんか。

嫁 ああ、ああ、いつもそうだ。スズメはかわいがるく

せに、わたしのことなんかちつとも構ってくれやしない。

旦那 おまえなあ、……

嫁 のりだって、米だって、わたしが毎日毎日、切りつめ切りつめ買ったもんだ。たかがなんて言われる覚えはないんだよ！

旦那 わかった、悪かった、悪かったから——このネコたちを止めてくれ！

あっ！

メジロ

夫婦が口論をしているすきに、鳥たちはすっかりネコ姉弟に追いこまれる。ウグイス、シジュウカラは逃げ回り、メジロはスズメの手を引くがうまく逃げられず、ついにスズメが、ネコ姉弟の手にかかって倒れる。

鳥たち スズメ！

ネコ姉弟 いただきまーす。

— 暗転 —

エンディング

山。カラス、カラスの部屋に板付き、スポット。

カラス

夜をひとさじ、すくうのです
星がどろりと溶け出して、
眠るまぶたにこぼれ落ち、
きらきらはねる瞬きは、
暗い山へと染み消える

鳥たちと旦那、重い足取りで登場。ミミズクが先導し、ウグイス（もしくはシジュウカラ）、階段を上がる。カラスの部屋の前で二つ、音を立てて足踏みをする。

カラス
ミミズク

だれだ。
スズメですよ、カラス。

カラス
ミミズク
……どうした。
カラス、手を。

カラス、手を差し出す。ウグイス、おそろおそろ、目玉を乗せる。

ミミズク

目ですよ、カラス。スズメが、取り返して来たんですよ。

カラス

目？……そうか。しばらく離れているうちに、ずいぶん小さくなったなあ。

カラス、目玉を慈しむようになでる。沈黙。だれもがカラスを見守っている。

カラス

下がれ。

ミミズク

はい……あの、スズメは……

カラス

全員、下がれ。

ミミズク

……はい。

鳥たちと旦那、カラスの部屋から離れる。ゆっくりとはばたくシルエットが浮かぶ。

カラス

夜をひとさじ

夜をひとさじ、すくうのです

おまえの瞳に永遠の夜を

カラス

……おやすみなさい。

カラス、立ち上がり、ふらりと舞台奥へ落ちる。落下音を合図に全員ぴたりと止まり、無人になった部屋を見上げる。

—幕—